

【鉱工業②】

なぜ鹿角に工業製品の会社が多いのか

-物流について-

代表者 3B 金澤 英伍
指導者 泉谷 優里

はじめに

鹿角地区は、尾去沢、不老倉、小真木、小坂といった県内屈指の大鉱山を有し、栄えた地域である。江戸時代には、幕府の御用銅として長崎港から輸出されていた。明治大正のころは洋式技術を取り入れ隆盛になり、多くの労働者が集まった。昭和初期には、太平洋戦争の軍需のため多くの人が動員され増産していたが、昭和中期になると、銅価格の下落により鉱況不振となり、閉山を迎えた。

藩政期には盛岡藩領で、尾去沢鉱山で産出する銅はその重要財源であった。花輪・毛馬内地区は、製材・木材・醸造などの地場産業に加え、鉱山の関連で金属・化学工業が発達。閉山した鉱山の跡地に電機工場などが進出した。

また鹿角市は、北東北3県のほぼ中心に位置し、鹿角八幡平、十和田の2つのインターチェンジがあり、盛岡市、青森市、八戸市などの主要都市と90分圏内で結ばれている。

この調査では、鹿角の立地と材料や輸送の面から迫っていきたい。

I テーマ設定の理由

鹿角には、昭和40年代ごろから誘致企業が多くやってきており、まだまだ操業を継続している会社も多くある。また、鉱山で栄えた地域ということもあり、工業製品の会社のイメージをもつ生徒が多い。

さらに、1983年（昭和58年）10月20日、東北自動車道安代インターチェンジから鹿角八幡平インターチェンジ間が開通し、秋田県内では最初の高速道路併用開始となった。その後、十和田インターチェンジ、小坂インターチェンジと開通した。鹿角地域は、秋田県内では唯一東北自動車道のインターチェンジが設置されている地域である。

この高速道路併用開始が関係しているのではないかと考えたため、物流というサブタイトルをつけて、この研究テーマに至った。

〈グループ分け〉

創業年から 探る	3B	金澤 英伍
	3B	湯瀬 海渡
	3C	菩提野大将
地図から 探る	3A	中村友香里
	3A	望月 咲良
	2B	兜森 歩海
データから 探る	2C	相川 晟司
	2C	大越 広空
	2C	高田 丈寛
	2C	湯瀬 颯人

II 実施計画

- 1 鉱工業全体オリエンテーション
- 2 鹿角地域の企業、物流会社を知る
- 3 各企業の創業年を調べる
- 4 高速道路について調べる
- 5 出前講座
- 6 まとめ
- 7 発表会に向けた準備
- 8 発表会

Ⅲ 調査・研究内容

1 オリエンテーション

まず、オリエンテーションとして鉱工業領域全体で、資料をもとに鹿角地域の第2次産業における実態を把握した。

さらに、鹿角地域の企業や県誘致企業、物流会社などを取り上げ、鹿角地域にはどんな会社があるのか、どんな工業製品を作っている会社があるのかを確認し、研究への動機づけを図った。

2 各会社の創業（設立）した年の調査

各会社の設立した年を調べることにより、時代背景による影響があるのかを研究した。

3 各会社の立地から研究

鹿角の地図を拡大したものを作成し、そこに会社の位置を示し、立地条件から研究を進めた。

4 出前講座

鹿角市役所産業活力課商工振興班の木村さん、板橋さんを招き、「鹿角市の商工業の振興について」というテーマで講話をしていただいた。鹿角市の産業がどういった歴史を辿ってきたのか、現在の鹿角市の産業構造はどうなっているのかを詳しく知ることができた。また、地域産業の活性化のために力を入れている事業についてもお話していただき、鹿角市が様々な取り組みを行っていることを改めて知ることができた。



図1 出前講座の様子

5 製造業の推移のデータから研究

製造品出荷額等、従業者数、事業所数を年度ごとにまとめたグラフから時代背景とともに、探る。

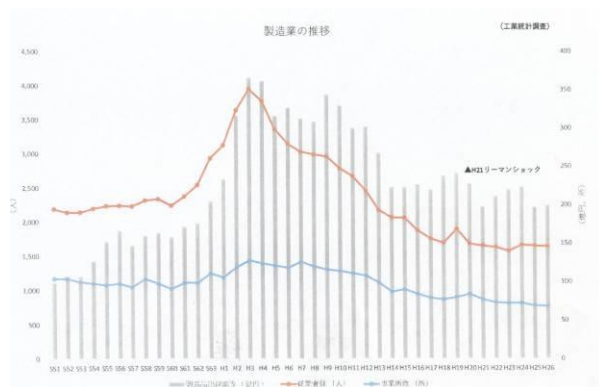


図2 製造業の推移(工業統計調査より)



図3 作業の様子

Ⅳ おわりに(まとめと今後の課題)

「なぜ鹿角には工業製品の会社が多いのか」というテーマで、研究を始めたが、全体の割合としては思っていたよりも低いことが分かった。しかし、出荷額や従業員数からみると、工業製品の会社（製造業）の割合が高いということを知ることができた。

今回の研究では、鹿角の製造業の会社がどのような時代背景のもとで、成長してきているのか学ぶことができた。さらに、鹿角の産業構造について詳しく知ることができた。また、鹿角市が地域産業の活性化のために、企業の高度化支援・新産業の創出・地域内連携の活性化を柱として、様々な事業に取り組んでいるということも知ることができた。

今後の課題としては、鹿角にどんな会社があるのか、どんな取り組みを行っているのか知ることはもちろん、その鹿角にある会社が他の県や市町村とどのようなつながりがあるのか、どんな役割を担っているのか知ることによって、さらに地元鹿角の魅力に気づき、自分からその魅力を発信していくことができるようになるのではないかと感じた。